

令和4年11月24日 第3号
横浜市立浦舟特別支援学校

学校長様
児童支援専任・生徒指導専任様
特別支援教育コーディネーター様
養護教諭様



連携支援だより

山々もうっすらと雪化粧を始め、冬の訪れを感じる頃となりました。浦舟特別支援学校の教室の窓からは雪をかぶった富士山がきれいに見えるようになってきました。

10月20日、浦舟特別支援学校ではオンラインでゲーム依存について研修を行いました。



第2回 「学校と医療の連携」
～ゲーム行動症から見える子どもの問題～
神奈川県立精神医療センター 依存症診療科
医師 青山 久美氏



背景をとらえる大切さ

- ・小中学生、高校生を対象としたインターネット利用調査からは、どの年代でもゲーム利用が多いことがわかる。小中学生の約半数は、平日2時間以上ゲームに費やしている。
- ・ADHD、ASD、うつ状態、逆境の体験とゲーム依存には相関があることが分かっている。
- ・現実では満たされない欲求を、ゲームの中で満たしていることもある。
- ・ゲームが居場所となっている子どももいるため、一概に「ゲームが悪い」とは言えない。その背景をとらえることが大切。

支援のコツ

- ・保護者だけが抱えこまないように、地域全体で家庭を支えていくことが重要。
- ・「どんなゲームをしているの？」と興味をもって聞くことが、依存の背景を知るきっかけになる。
- ・学校や家庭は、安全基地となるように、ゲーム以外の健康的な関わり（家族と散歩、料理等）を増やしていく。
- ・薬物療法や入院等の治療は、本人の意思に沿って進める。
- ・使用制限等のデジタルデトックスは、子どもの発達段階や意思の有無により効果が変わる。
- ・ゲーム行動症は、本人の努力だけでは解決が難しい。「病気」であると心得て、本人の特性、本人と家族に“ちょっとおせっかいに”支援することを意識する。

青山先生には、限られた時間の中で、わたしたち教員が知りたいことをぎゅっと詰め込んでいただき、中身の濃い研修となりました。子どものこころの問題に即効のコツはなく、『子どもがゲームに夢中になる背景を理解し、健康的な部分を増やすことで、現実居場所を作る』という、時間はかかっても大切なことを積み重ねていくことが一番の近道なのかもしれません。ご質問もいくつかいただき、青山先生にお答えいただくことができました。ゲーム依存に悩む児童生徒や家族への支援を考えるきっかけになることを願っています。

ニーズの多いテーマでもあり、多くの先生方にご参加いただきました。ありがとうございました。



お知らせとお願い

浦舟特別支援学校には学区がなく、4つの病院（横浜市立大学附属市民総合医療センター・横浜市立大学附属病院・横浜市立市民病院・横浜市立みなと赤十字病院）の院内学級、そのほかの横浜市内の中核病院に入院しているお子さんには訪問指導学級で授業を行っています。また、病気が原因で学校生活に困難を抱えているお子さんへの支援について、一緒に考えさせていただくセンター的機能の役割を全市に対して担っております。利用を迷う場合にも、ぜひお声かけください。

また、浦舟特別支援学校で学ぶお子さんが、退院後に戻る学校で困らないよう、さまざまなお願い（学習進度をうかがったり、学習プリントやおたよりの送付をお願いしたり）をすることがあります。転出後は、お子さんが安心して元の学校に戻れるよう、学校の先生方にも不安なくあたたかくお子さんを迎えていただけるよう復学支援やアフター・フォローの充実に努めています。お子さんのために連携を密にしていきたいと考えております。お忙しい中とは存じますが、小・中学校の先生方にはご協力をお願いしております。これまでご協力をいただいている先生方には感謝を申し上げますとともに、引き続きのご協力をお願いいたします。

教育相談について

病気が理由で、市内の病院に入院しているお子さん、登校ができていても病気に対する配慮が必要なお子さんについて、教育相談を受け付けています。

学校だけでなく、保護者からの相談も受け付けておりますので、ぜひご紹介ください。

担当：浦舟特別支援学校 特別支援教育コーディネーター 鈴木 TEL 243-2624

***お手数ですが、貴校全職員への回覧をお願いいたします。**